

皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリヤの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行つて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。／谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。／曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」
—ルカ 3章—

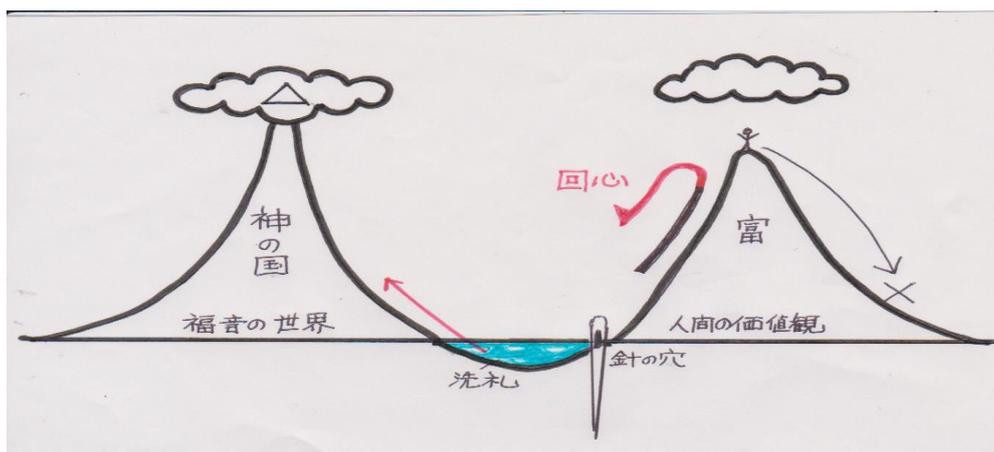
喜びに変わる道

自分で掘った穴に落ちて行くように、神から離れて国を滅ぼし、捕囚の身に囚われて行った神の民イスラエルに”それ見たことか”と見放さず、神は、悲しみに打ちひしがれた民が「喜び」に代わる福音を、預言者を通して伝えます。

神を捨てて自力で幸せを求めた生き方が、滅びと死を招いて、もはや元に戻る道も見出せない挫折の中で、神が与える「喜びに変わる道」とはどんな道なのでしょう？

人が不幸を招いた経緯には、あるパターンが見えてきます。——命は最も貧しく生まれ、母親をすべてとして生かされてきたことに気づかず、成長して少し力がついてきたら一人で大きくなったような顔して、周りはすべて自分の幸せに奉仕する製品であるかのように見なし、自分中心に生きたある日、自分の持つすべての力をそぎ落とされる、その時、前方には、悲しみが喜びに代わる道はありません。あるのはバーチャルな世界から現実に戻る道だけ。それは出発点にまで戻ること。すなわち、貧しく無力であった命に立ち返ることです。

この命がすべて周りから支えられて、自前の者は何一つなかったと気づくとき、すべては与えられた恵みだったと悟る時が、真の自分自身に出会う時であり、無くすものが何一つない、安定した落ち着きを取り戻す場なのです。かつて母に見守られて、すべてだった赤子に帰って、神をすべてとしたあの不動の歓びに満たされる場。神への道なのです。



これが、イスラエルが神から受けた「喜びに変わる道」でした。